

| | | | |
|---------|----------------------|-----------------|-------|
| 氏名 | 森岡 希世子 | | |
| 学位の種類 | 博士 (芸術) | | |
| 学位記番号 | 第41号 | | |
| 学位授与日 | 平成28年3月25日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項 | | |
| 学位論文題目 | 光の呼吸—透光性磁土を素材とした器表現— | | |
| 審査委員 | 主査 | 金沢美術工芸大学大学院専任教授 | 橋本 真之 |
| | 副査 | 金沢美術工芸大学教授 | 山本 健史 |
| | | 金沢美術工芸大学教授 | 山崎 剛 |
| | | 金沢美術工芸大学大学院専任教授 | 横山 勝彦 |
| | | 姫路市立美術館副館長 | 不動 美里 |

| | |
|---------|---------------------|
| 審査対象作品数 | 3点 |
| 論文分量 | 本文A4版、165頁(85,732字) |
| 付録の図版 | A4版16頁、収録作品総数15点 |

論文要旨

森岡希世子の学位申請論文『光の呼吸—透光性磁土を素材とした器表現—』は、制作の目的としての自身に内在する「寡黙な世界観の現前化」、とくに、ここで言うところの「寡黙な世界観」を、「自身の内側に灯る「白くぼんやりとした光」のようなものを根底に、その光に支えられ導かれながら培ってきた世界観」として、その世界観にもとづく、透光性磁土を素材とした器表現について考察した論文である。第1章「研究の背景」、第2章「作品紹介及び制作工程と要素」、第3章「形」、第4章「科学的側面からの考察」、第5章「器表現」の全五章、および資料「展覧会報告」で構成されている。以下にその概略を記す。

はじめに、「世界観の意識化は、デンマーク留学での体験である。そこで感じたことを言葉にする。今、身の前に広がっている風景にある風や木々、鳥や人は、長い歴史の中で必然と、あるいはその中の偶然とがそのまま表出しているものなのではないか。人の存在もただその連鎖の中に在るもの。だから今、目に見えているもの、感じているもの、それを感じている自分、そこにある身体をそのまま受け入れてあるがままに生きればよい。しかし、自身の世界観は言葉では言い尽くせない。その言葉では表せないものを作品で伝えることはできないだろうか。私は他者が手に取って使用する「器」という形態にすることで、視覚、触覚から自身の思いを「手→器→手」へと伝えていく方法を選んだ。今日、溢れる情報を処理しながら前に進まなければならない慌ただしさの中で、置き去りにされがちな時間「生きていること」をそのまま味わう時間の必要性を強く感じている。日常の中で小さな「生の時間」が個々人の生活を支えるものであるという思いから、「生の時間」の中に共生・共存できる「器」での表現を試みた。自身の理想の表現とは、私の生きる支えとなっているような「光」を他者の心にも届けることである。しかし、声高に提示するわけではない。制作の目的は、「寡黙な世界観の現前化」である。が、その先の到達点は、自己の開示にとどまらず、作品を通じて他者の心の中に「その人の光」を灯すことである。本論では、「寡黙な世界観」の表現が、どのように日常を共に生き、他者の心に「光」を灯す「器表現」となるのかを考察する」ということを述べて論述の導入とした。

第1章「研究の背景」は、博士後期課程での研究に繋がるそれまでの制作の背景を、年月を追いつながり、制作目的の変化と共に区切り、論述した章である。第1節では、「制作の動機と原点」

として主にデンマーク留学での体験で得た世界観について考察した。次に「基礎技術の習得」として九谷焼技術研修所、九谷焼窯元で習得した技術をもとにした制作について述べ、最後に「表現の追究」、として白磁に至るまでの作品遍歴を考察した。第2節では、博士後期課程入学動機に繋がる「白磁の追究」について、「白磁制作を目指すきっかけは、自身に内在する光、私の生きる支えとなっている「白いぼんやりとした光」である。私はこれまで制作に迷い自身の内側と向き合う時、最後にたどり着くのがいつもこの白い光であった」としたうえで、この光を源とした表現方法への経緯を述べた。

第2章「作品紹介及び制作工程と要素」は、博士後期課程での研究を中心に述べ、そこから得た制作工程に於ける要素について論述した章である。第1節「博士後期課程での研究主題」では、研究主題について、「博士後期課程での研究主題は「透光性磁土の特性と轆轤成形の特徴を追究しそこから生み出される美によって日常を豊かにする」であり、方法として「日常に非日常を感じさせることで豊かにする」とした。非日常性とは習慣化されていない出来事で心を解放させるような瞬間のことだと考えた。非日常的時間は「生きていること」を味わう時間であり、その時間で得られる安らぎや余裕が、心の活動や人と人の繋がりをより豊かなものにすると考えこの主題とした」という主旨のことを述べた。第2節「作品紹介」では、この研究主題のもと制作した作品群、作品「なめらかな闇」(作品1-3)、「透雲」(作品4-6)、「光の呼吸」(作品8-15)を紹介した。第3節「素材について」では、すべての作品の素材として用いている九谷透光性磁土の特徴と、その他の窯業産地での透光土についての取り組みを述べ、「博士後期課程での研究に於いて、作品「光の呼吸」に至り、この形態を自身の表現方法の一つの到達点として捉えることができた。それを踏まえこれまでの制作に於ける特色を考察すると「白色」「透光性」「質感」「焼成」という共通項が確認できた」とした。第4節「感覚に訴える効果としての要素」では、この共通項を考察し「感覚に訴える効果」として「白磁の効果」「透光性の効果」「質感の効果」「高温・還元焼成効果」に分類し、その意味合いについて考察し、次のように述べた。「白磁の効果」については、白磁の歴史的背景及び、「白」の精神的側面を考察し、自身の表現したい「白」として「他者の意図や心、その場の色を反映させる色」としての効果について述べた。「透光性の効果」については、光の反射の法則などを参考に透光の構造を考察し、自身の作品において透光性に期待する効果が「日常の光を再認識する効果」、「内と外の区切りを結び付ける効果」であることを述べた。「質感の効果」については、素焼と本焼きでの研磨方法とそれにより得られる効果を考察し、研磨後に表れる質感が、「形の緊張感を和らげる効果」、「柔らかい表層の光と白色を生み出す効果」、「手にしっとり馴染む効果」をもたらすことを述べた。「高温・還元焼成効果」については、焼成方法の操作により得られる素地の色の変化と、透光性を上げるための高温焼成について試験工程と結果から得られた効果を考察し、高温焼成には、作品に「緊張感を生み出す効果」があり、さらに「強度・透光率・白色度を上昇させる効果」があることを述べた。そして、以上により作品が醸し出す雰囲気には、「感覚に訴える効果」の複合的構成により、使用者の創造性を引き出し、私的な世界観の溢れる、非日常的な時間へ導く効果があると考えることが出来たとした。

第3章「形」は、自身の制作に於いて最も重要であると考え「形」について論述した章である。第1節「轆轤について」では、轆轤成形方法の特徴と、「ある種の感覚」の現前化を目指した成形工程の要点を考察し、「自身の制作に於いて手足と変わらぬほどの道具として土と轆轤がある。轆轤成型の基本は「内側の形が外側を決める」と言われ、形は外側のラインではなく内側のラインから導かれている。物の形はその内側と外側の緊張した関係により成り立つと考え、常に内側からの張りの強さを失わせないように成型する。さらに土の特徴である可塑性が手で直接触れられることにより自身に内在するイメージにより、近づくことができると考えている。現在の作品形態は、この轆轤を引き磁土を扱い続けてきた中で生まれ育まれてきた「ある種の感覚」と自身に内在する感覚が融合したものだ。「ある種の感覚」とは、土の動きと心の動きが無理なく重なり、互いの性質を考慮しながら進む対話のようなものである。その対話が形となって表れている。この形と

磁土の特性が作品の基本である」という主旨のことを述べた。第2節「形への探究—形という観点において—」では、博士後期課程に於ける制作作品での形に関する探究について、「1年次の制作作品「なめらかな闇」では、観念の器としての形の探求を行った。次に形と表層模様が絡み合う作品形態、「透雲」及び「黙」を制作した。2年次では「壺の形」に於いて、「自身が美しいと感じる形」を考察し、その結果を踏まえ「光の呼吸」では細部へのこだわりを追究した制作を行った。観念の形、表層と形、自身が美しいと感じる形、細部へのこだわりを考察し、確認できた「形」の共通点は、「内側からの張りのあるもの」「轆轤成形による緊張感のあるもの」「土に無理を掛けない素直な形」「全体の形と口縁、高台とに統一感があること」「焼成での「ゆるやかさ」のあるもの」「中央の円のバランスが整っているもの」「細部にまで気を配れるもの」である。「形」はコンセプトに合わせ変化するが、基本的にはこれらの条件を満たすものであった。現在の制作で現れている形の源流は、磁土の轆轤成形によるもので、それらは磁土を扱い続けるなかで生まれた「ある種の感覚＝土の動きと心の動きが無理なく重なり、互いの性質を考慮しながら進む対話が形となって表れる」からきている。この感覚をもとに作られた形が自身の特徴であることが考察により確認された」という主旨のことを述べた。

第4章「科学的側面からの考察」は、第2章第4節に於いて「感覚に訴える効果」として分類した項目を科学的側面から考察するため、石川県工業試験場（九谷焼技術センター）にご協力頂き、「白色度」「透光率」「曲げ強度」「吸水率」「還元濃度」の測定を行い、その結果として、「高温焼成により「白色度」「透光率」が上がる」「高温焼成1回、及び研磨有りが、曲げ強度が高い」「1250℃以上の焼成では吸水率がほぼ無い」「作品「光の呼吸」における還元濃度は、一般的なものより低い」という結果を得て、制作に於ける科学的な根拠として詳細を記録し、考察したことについて論述した章である。

第5章「器表現」は、自身の器表現について論述した章である。第1節「器の社会的属性」では、現在という時代の中で各地域や生活様式などの中で求められているものに対して、「素材を厳選し素材と向き合い・技術を研鑽・積み上げることで応えていく」、それが器の制作の根底にあるということ述べた。また、それを踏まえ、現代での器の精神的機能として「生きていること」を共に味わう時間に共存する器の必要性について言及し、自身の制作は「日常に非日常を感じさせることで、「生きていること」を実感する時間を生み出し生活を豊かにする」ことを目指したものであることを再度確認した。第2節「非日常へ導く器」では、自身の制作が「感覚に訴える効果」の複合的構成により、使用者の創造性を引き出し、私的な世界観の溢れる、非日常的な時間へ導く効果があることについて、第2章の考察を踏まえて述べ、自身の器表現を「非日常へ導く器」と位置付けた。さらに、非日常的感觉を与える外観的要素を、博士後期課程で制作した各作品で考察した。その事柄とは、作品「なめらかな闇」では器形であるのに実用性がないこと、作品「透雲」では表層色彩による錯覚、作品「光の呼吸」では薄さと白さ、透光性が、非日常的感觉を与える主な要素であることなどである。次に、日常使いに必要な実用的機能とこれまで考察してきた「非日常的感觉を与える要素」との関係性を各作品に於いて考察した。結果、機能と表現は絡み合いながらお互いを高め合い、作品の中で実用性と表現が一体となり、視覚と触覚を複合させることで「器表現」という表現方法となるという考えに至った。そして「器表現」に於いては、「実用的機能と自己表現・精神的機能は互いに切り分けられるものではなく、見せ方や使い方で如何様にも捉えることのできる可能性の広がりがある」とした。

そして自身の「器表現」について、「自身の「器表現」の最終目的は、自己の開示にとどまらず、作品を通じて他者の心の中に「その人の光」を灯すことである。自身の器表現では、まず、自身に内在する「白いぼんやりとした光」を根底とした世界観の現前化を目指した。次にその世界観を日常の器で表現することで、他者の生活を豊かにしてゆくことを追究した。器という形態をとることで視覚・触角から自身の世界観を手→器→手へと伝えていく方法を選択し、他者の日常に共生・共存することを目指した。さらに、作品が醸し出す雰囲気や「感覚に訴える効果」として追究

し、それらの効果の複合的構成により、使用者の創造性を引き出し、私的な世界観の溢れる、非日常的な時間へ導くとした。この「非日常へ導く器」により、他者の日常に非日常をもたらし、「生きていることを」そのまま味わう時間を生み出す。他者はその導かれた、非日常的時間の中で、自身の存在を再認識し、「生きていること」を実感する。それにより心に「その人の光」を灯す。この「その人の光」が灯ることが制作の最終目的である。さらに実用的機能により器の使用者の創造性が、器を使用する場に集う人々の創造性を引き出し、新しい繋がりを見出していく。この創造性の連鎖、人と人を繋げていく作用も「器表現」に期待している」という主旨のことを述べて、ここまで、「寡黙な世界観」の表現が、どのように日常を共に生き、他者の心に「光」を灯す「器表現」となるのかを考察してきた結果とした。

以上の論述を踏まえ、「博士後期課程での制作では、日常に非日常を感じさせることで生活を豊かにすることを追究した。その追究の結果、作品「光の呼吸」の制作に至った。器が備える実用性と視覚、触覚などの感覚的な効果により、使用者の情緒に働きかけ、創造性を引き出し、私的な世界観の溢れる非日常的な時間「生の時間」を生み出す。その私的な世界観へいざなうことで、他者の心の奥底にも「目には見えない光を灯す」、ことを目指した作品である。さらにその光が他者の周囲にも小さな灯をともし、互いに共鳴しながら共存していく日々の暮らしを願ったものである。作品「光の呼吸」での表現方法は一つの方法に過ぎないと考えている。今後も他者の生き方や人生に光を灯せるような、日常の「器表現」を追究し、一人一人の「光」が一人一人の心に灯り続けることを、制作を行うことで願い続ける」という主旨のことを述べて結びとした。

論文等審査結果

審査会は、申請者の提出論文及び研究作品が平成27年9月15日に行われた予備審査会に提出され了承された議論と内容に合致しており、また、その際に指摘された事柄に基づいてさらに発展させ、完成されたものであることを認めた。

主査の橋本審査員の進行のもと、口述試験ではまず申請者が本論要旨を、画像を用いながら述べた後、各審査員の質問に申請者が答えるという形式で行われた。

○ 口述試験概要

橋本審査員

橋本：私には論文とともに山鬼文庫での展覧会の印象が強く残っている。森岡さんは今生きているこの時を肯定して生きていく、あるいは生きていきたいという、人としてバランスのとれた生き方をしたいのだと感じた。私とは正反対の生き方だと思うが、実際に山鬼文庫の展覧会を見ると、むろん、とても美しくていいと思った。けれども将来、森岡さんにとって受け入れがたい時あるいは環境に遭遇しても、そのバランス感覚が生きるかどうか、というのが大事なのだろうと思う。今後、バランス感覚が過度になりすぎて、制作の方向が保守的にならないか、あなたの弱点にならないか、とても気になる。だから、あなたにとって保守性というものがどうなのかを質問したい。冒険する精神を失ってしまえば、器は、日常雑器の世界のほうが豊かで安心なものだ。これまで私はあなたの仕事に大きさを要求してきた。今回の金沢21世紀美術館での展示作品でも、限度いっぱいのことをやったと思う。しかし、まだあなたの方法の限界ではない。技術的な限界についての心構えも聞きたいと思う。おそらくその先にくる成果によって陶芸界でのあなたの位置が見えてくる。それをやり続けることが必要だと思う。もうひとつは本焼き後の削りの問題である。素焼きの段階で削っていて、それがかなりの分量だという事である。いちばん最後に普通ならその段階で完成してしまうことが多い本焼き後の段階でまたいじっている。またいじっているところを、もっと

極端にやることができないのだろうか。ガラスの作家はできた形を最終的にまた削ったりする。削るというよりは砥ぎだが、玉の世界のようなところに近い仕事をする。本焼き後の仕事のその先をもっとやってもいいのではないか。その可能性を聞きたいと思う。

森岡：博士後期課程の一年次の課題として、保守的な部分を壊して自分の中で世界観を見つめ直すという試みをおこなった。黒い作品を作り、最終的にあらわれてきたのは、土の力というか、割れてしまう、あるいは大きすぎて形にならない、といったところだった。しかしそれが課題として残ったというよりも、今後の制作に、割れた切り口の割れ方や表情などから次へのステップとなる表現のかけらが見えたように感じた。だから今後も少しずつ積み重ねて行きたい。また大きさの限界に挑戦できたのは、自分でも非常に勉強になり、ここまでできるということがわかってよかった。窯が大きくなるともう少し大きなものも作れるようになる。技術においても、練習を重ねれば今よりも大きいものができる。それには技術の向上と、窯、設備の確保、あるいは粘土の質などが関わってくるので、挑戦し続けたい。そして研磨の技術については、ガラスで使われているサンドブラストで表面を削って、形の変化、陰影などを変えられないかということに挑戦したことがある。けれども未だにそれは表面の処理がうまくいかず、ざらざらのまま残ったりして難しい。

橋本：ガラスの人たちがやっているのは、共擦りといって、同じ材料同士を互いに擦り合わせる。重量がないと難しいのかもしれない。あなたの場合は回転体だから、たとえば回転させておいて、それに同じ材料のもの、あるいは木賊など草系統のものを当てるとか、私も明確な技術的知識があるわけではないので詳しくは言えないが、他の分野のことにももう少し目を向けてもいいのではないか。

森岡：試したいと考えている方法の中に、漆の分野における磨く工程がある。それを回転しているものにあてがうということを試してみたい。また石屋が墓石などをピカピカにする技術を陶芸で使っている方もいて、その表面を光らせる技術にも興味をもっている。

橋本：金属の方は炭砥ぎと言って朴炭で砥ぐのですが、それで鏡面にはならない。朴炭の後に、いわゆる磨きをかけ、そうすると鏡面になる。森岡さんの場合は、ここまでやったのだから是非いろいろ試みた方がいいと思う。

山本審査員

山本：論旨の口述で、手ざわりと表面、白さの効果について述べていた。素焼きの段階を含めて最大で3回焼成し、研磨する。ここまで丹念に磨いていく作家はいない。本論文中に、研磨することによって自身の内側にある光に近いものになったという記述がある。土のダイレクトな感触だとか白さに対し、研磨することでそれが伝わっていくということはよくわかる。しかし、一方で釉薬を使ったもの、たとえば白磁の作品など、そういうものにはそういうものの良さもある。釉薬を使うことや、そうした作品を、あなたはどのように評価しているのか。

森岡：釉薬を使用することに関して考えたことがあまりない。自身の中の光には質感のようなものがあり、それが光っているものではない。その光っていない、光沢のないマット質なもの、もしかしたら触ると柔らかいかもしれない、硬いかもしれないという、わからない質感がいちばん近いと感じている。釉薬のない磁器、磁肌が、何となくある私の感覚に近い。

山本：作品を触ったときのしっとり感が非常にいい。触感について、どう考えているのか。

森岡：質感としては、温度的に低くないむしろ温かいというか、やわらかさといったものに近い温度をもっていると思う。その温度のようなものをあらわすための質感でもあるので、質感のつややかさからしっとり感を、冷たさではなく温かさの方を、感じていただけるように工夫したい。

山本：3回にわたって焼くことが影響していると思うが、しっとり感とともに、星のような、空間に浮き上がるような雰囲気は、一般的な磁器を超えている。ただ金沢21世紀美術館の展示は少し残念で今後は見せ方を研究してほしい。本論文中に、機能をもたないことを前提とした炭化作品に取り組んでいく中で命のつながりについてわずかだがヒントを得たとあり、第3章に、形を現前化

させる作業の中で形態の模索や成形時の感覚が思考とつながり、「張り」という言葉に集約されていくとある。この張りの感覚を私はある程度理解ができるが、一般にはなじみにくい感覚である。

森岡：張りとは、めざす形の中で、遠心力による内側からの力を最大限に残した形態のことだと考えている。遠心力によって土が伸びていく。その伸びる変化を指先のわずかな変化やスピードでとらえながら形作っていく作業の中から生まれる形である。土は触りすぎるとコシがなくなり、かかる遠心力に堪えられなくなってくる。すると形は作れても焼成で崩れていく。磁器では特に成形時に土をしっかりと硬く締めながら挽く。この締めりがあるうちに形を仕上げることで、成形後も轆轤成形での遠心力による内側からの張りが保たれる。張りは、遠心力をとらえて内側からの力で土に締めりがあるうちに形を作りあげたものにはすべて存在すると考えている。

山本：今回、大きい鉢の作品が展示されたが、焼成のときの少し歪みというか、たれの部分を、自身でどのように評価するのか、無い方がいいのか。

森岡：あの歪みというか、重力によって落ちてしまったものを、展示するまでは張りがないように感じていたが、展示の仕方、見え方でとても変わってくるのが今回の展示で勉強になった。今後の展示では、歪みと光と器の張りをあわせた、見え方の差のようなものを考えていきたい。

山本：透光させるために薄く削るから歪みが出やすい。ただそれは素材なりの特性というか、結果のあらわれであり、厚さの調整や焼成の仕方など、否定的ではなく肯定的に考えてこれからの課題とすればいい。薄くすれば丈夫さや熱伝導の関係で使い勝手に影響が出る。あなたは用途によって厚さの調整を考えるとというが、視覚的効果だけではなく機能面に、当然薄さが影響をおよぼす。必ずしも軽ければいいというものでもないが、制作時にどのような工夫をしているのか。

森岡：機能面での重さは、用途によって使い分けることが大事だ。実用性を重視して厚く作る例としては、フォークやナイフを使う皿など、カチャカチャという音がたつといやなものは厚く作る。熱いものを注ぐ器は、縁だけを少し厚くし、縁を反らせて少し持ちやすくする。徳利などは少し厚めに作って、熱くても大丈夫のように作る。薄い方がよい食器も、最近は増えている。煎茶とか台湾茶。最近は台湾茶が主だが、そういう器は、茶の色がよく見えるように薄いものが好まれることがある。酒の器などもそうだが、口当たりなどから味もよくなるという意見があり、酒器や茶器は薄い方がよいという意見もあって、より薄く作るように心がけている。

山本：本論文の炭化焼成や白磁に関する化学的な実験データは非常に貴重で高く評価したい。

不動審査員

不動：「光の呼吸」というテーマは、作品のタイトルであると同時に、研究の大きなタイトルでもある。全般を通して、制作するということの内的な必然性に確固たるものがあり、そのことが非常に重要だと思う。論文の内容は大変に充実しており、データについては詳細にわたる記述があるが、制作に関する内的必然性について、もう少し補足するとすれば、どのようなことだろう。

森岡：「はじめに」のところが、私がいちばん言いたいこと、伝えたいことを書いた箇所、すべてと言える。書いてあることを、どれだけ作品で表現できるかというところで制作している。

不動：その中で繰り返し出てくる言葉に「内面にある白くぼんやりとした光」があり、それを自覚したときのことや、その光が自分の中で生成したという体験のうちに、大事なことがたくさん含まれている。デンマークでの体験も契機となったと思う。そこについてもう少し教えてほしい。

森岡：白いぼんやりとした光というものは10代のころに考えついたもので、私は舞台の音響の仕事をしていた。表現とは全然違う機械を通しての仕事だったが、役者が体だけで表現して目の前にいる人を感動させている状況を目の当たりにして、自分も人を感動させ、元気にさせるような仕事につきたいと考えた。自分は何を人に伝えられるのだろうと悶々と考え、自分の中にある光みたいな支えが、もしかしたらみんなの中にもあり、いろいろな色だったりするのかもしれないけれど、そこと直接対話できるもの、さらにもっと奥にある心の深淵みたいなのところにまで届くような、そういう仕事ができるようになりたいという気持ちが湧き、今に至っている。

不動：白くぼんやりとした光という無形のもの。その内容というのは、いわば森岡さんの生き方そのものであり、無形の膨大なものが、そのコンテンツ、内容になるのだと思う。それを表現するために有形のものにする方法として、土、その中でも透過性磁土の陶表現というところに到達した。昨日、展示に関して質問をしたが、今回、展示する中で気付いたことを、あらためて聞かせてほしい。

森岡：今回の金沢21世紀美術館の展示では、日常食器の展示ではなく透光感と形、それを伴う食器の与える印象を強く感じてもらうことを目的とした。結果としてその目的に到達できなかったと反省している。原因は、3点の作品の見せ方にある。光の差がありすぎたこと、あるいは明るすぎて質感が消えてしまったことで、光がせめぎ合って、作品の存在が希薄になってしまった。いちばん見せたかったことはやはり、作品から醸し出すイメージが人の心を動かすようなものであるということをめざして展示していたので、今後はそこを課題として展開していきたいと考えている。

不動：本論文中では、光に関する考察とともに、透光性に関する考察が非常に優れていた。特に『陰翳礼讃』から抜粋された内容や、障子など空間の内と外とを切り結ぶ効果ということに焦点を当てて、光そのものや陰影の変化という現象面だけではなく、作品そのものが、言わば光の媒体となっていることに関して、深い考察がされている。透光性磁土と光と影をめぐる美意識との関係を、自分の言葉で具体的に説明するとすればどのようなになるのか。

森岡：光は透過するものだが、透光しない光、反射する光、吸収して中で拡散している光、そして透過してしまう光に分かれていて、当たる光の色、強さによって、器に写る色が全然違ってくる。透光性のある器のいちばんの特徴は、その場の光を捉えて、受けとめる。また発していくということだと考えている。器に写った色を見て、その場の人たちが、ここがどんな色だったのかを再認識し、心が「きれいだな」と動く。何だか吸い込まれていく、あるいははねつけられるというように、心が動いていく作用が、透光性という効果にあると考えている。

不動：器の社会的属性に関しても研究されている。これは重要な視点で、今後の森岡さんの課題でもあると思う。それを前提に何うが、今回の展示で発表した3点において、一品制作のアートワークと、実用に供することを前提とした器を、同次元で表現しようと意図していたと思う。表現者として、作家として、その方向性を自分の中でどのように考えているのか。

森岡：今後ははっきり切り分けていかなければならない。博士後期課程に入るまではずっと、実用を前提とする器を制作して展示していたが、今回の展示のように世界観を見せるというものと、それを見せつつも、厚さを変えたりアイテムのサイズを変えたりしながら実用的になるように落とし込んでいくという二本立てで制作に取り組んでいくのがベストと考えている。

不動：二本立てで進めることに自己矛盾が無いなら、その自己矛盾が無いということを説明してほしい。

森岡：今回展示した大きい鉢や壺は、実際に使うとなると使い方が非常に限定される。日用食器としては薄すぎて使うのに困るだろう。では何故そうしたかということ、やはり世界観を見せたかったからで、だからそこを自分の中で確認して、見る方にも伝えることができるように、そして日常生活にその世界観を引き落とししていくという作業を、私の仕事としていきたい。

不動：それについては、もともとデンマークでの体験が土台になって、特に北欧のものづくりのあり方、芸術に対する社会のあり方という森岡さんが関心を持ち続けてきた観点が今後重要になってくる。北欧の陶芸に関して言えば、アートとクラフトとデザインの三者が対立せずに相互に融合する形で社会の中で溶け込んでいる状況がある。作家も、作品制作として実験的な表現を試みる一方で、量産される食器の原型制作に取り組むということが矛盾なく行われ、それらを受け入れる社会基盤ができています。日本にはそのような意識や社会基盤があるとは言えないが、その中で森岡さんがどうしていきたいのか、その思いを聞きたい。

森岡：今おっしゃっていただいたように、ひとつ、自分の中で象徴するような作品を常に更新しつつ、その世界観を日常用として落とし込んでいく作業を常に続けていきたい。たとえばガラスで言

うとバカラ社の製品のように、極めて象徴的なものと普段は店で買えるようなものを社会に提供し続けたい。商業的な点で言えばそういうふうに活動していきたいと思っている。

横山審査員

横山：器表現という言葉が使われている。「器」という言葉が、食器なのか、あるいは食器の形をしたオブジェなのか。質疑の冒頭で橋本先生がおっしゃったように、森岡さんの今までの保守性が、あなたの制作を食器作りに限定してしまうのならつまらないという印象が正直言ってあった。そのところは明確に分けようとはしていると思が、その意識についてもう一度聞かせてほしい。

森岡：私が「器」と言うときには2種類ある。光を受けとめる器、気持ちを受けとめる器、命を受けとめる器など、そういう抽象的なものと、実際に食事や酒を入れる、水を入れる器といった具体的なもの。なかなか明確には分けて書けなかったが、自分の中でははっきりと分かれている。

横山：本論文中でいちばん最後のところに、「光の呼吸」での表現方法はひとつの方法にすぎないと考えているとある。つまり今のかたちが最終形態ではなく、今後の制作において様々な展開がありうると書いている。森岡さんは、自身の光というものを他の人にも伝えていきたいということ願っているが、その方法として、食器だけではないだろうと思う。あるいは器という形をしたオブジェだけでもないだろうと。何故かという、博士後期課程の一年次の作品「なめらかな闇」について書いた箇所に、制作した結果として「色や割れに表現の可能性を感じた」という記述がある。可能性があったのにそれをやめて、今の方向に収斂してきたのなら少し淋しい気がする。この「色や割れの表現の可能性」ということを今どのように考えているのか。

森岡：続けていきたい表現というか、今後の表現の一部です。割れないようにするというよりも、割れの割れ方や表面を研究してそれを創作していくということもできるのではないかと考えている。ただ可能性の広がりがありすぎて、博士後期課程3年間で集約できるものではないと感じ、ひとまず今は3年間で極められるところを選んで、自分のいちばん近いところから発展させようと考えた。

横山：現在の私の立場では「食器の形をしたオブジェ」と言いたいのだが、そこに至る化学的な実験とそのデータには感心している。ただあえて注文するとすれば形の問題がある。形の中央にある円というものが森岡さんの美意識の基準にあるということはよくわかったが、注ぎ口までの首の部分などの形については、オブジェとして見たとき、まだまだ甘いところがあるという印象を持つ。何故かという、今回の展示はよくなかったと思うからだ。当初、下からかなり強い光が出ていた。それが日常を思わせる食器にはそぐわない。逆に山鬼文庫の展覧会ときには、むしろ日常的な明かり、あるいは自然光だった。そういうことを考えたとき、やはり森岡さんの「光を届けたい」という思いに対して、今回の照明のセッティングは逆効果だったということがわかる。自分のコンセプトを正確に伝える展示を検討し、自分なりのやり方をもっと工夫してほしい。

山崎審査員

山崎：森岡さんは現田市松の盃を初めて見たとき、そこから何を受け取ったのか。

森岡：気負いなく、ただ挽いたものであると思え、そのはずはないのだが、本当にただ挽いて、ただ美しいという、何かこう、修練の先にある気品というか、ほかの人ではたどり着けない時間と経験と思いの積み重なりでしかあらわせないたたずまい、というふうに記憶している。

山崎：あなたはこの盃に出会った後に轆轤職人となり、職人として何個も何個も挽いているうちに、注文を受ける以上、よくない形まで仕事として挽かなくてはいけないことに疑問を覚えたこともあり、それで金沢美大で学び始めたと書いている。これを読むと、あの盃から受け取ったのは、むしろ否応なく出てくるようなこだわり、つまり自我の意識だったのだと思えてくる。

森岡：そうだと思う。何を挽いても美しく挽けるような、何をどんな形に挽いてもその人が挽くとほかの人と違う、というところで職人を目指していたが、そこまで気を遣えるほどの時間は無く、

一日何個というノルマの繰り返しの中でこだわりをどんどん捨てていかなければならない、ということになってしまった。目指すところと違う世界だと感じ、美術へ目を向けるようになった。

山崎: 136頁に「器の社会的属性」という図があり、社会との共振を大切にしたいと書いている。社会と共振しながら時間の流れや時代の流れの中で作品が変化していくと読めるが、作品自体は、むしろ社会と距離を保った、自我の強い作品のように感じる。その点で140頁の「非日常へと導く器」の文章と図は納得できる。図では、いちばん上に自我、その下に素材と技術があり、現在の作品について、轆轤を挽き磁土を扱い続けてきた中で生まれ育まれてきたある種の感覚と自身の世界観が融合したもので、それは自我と轆轤と磁土が身体に近いものになって表れてきた感覚であると書いている。もっと自我について論じてよかった。アンケートの中に、「料理用の器も見てみたかった。建水の陰影がとても美しく、ほかにも見てみたい。とても美しく凛としているのがすばらしいが、気の抜けたようなものも見てみたいと思った。気の弱い自分でも持っていることが許されるような」とあるが、これに共振して作風を変える必要な無いように思う。

森岡: 今回の展示作品のなかで、フォルムが少し緩やかだったものに関しては、享受してくれる方の声を聞いて、こういうことができるのではないかという要素を見つけることができた。

山崎: 149頁に、器表現の最終的な目的は、自己の開示に留まらず、作品を通じて他者の心にその人の光をともしることである、と書いている。そしてその先に、使用者の情緒に働きかけ、想像性を引き出し、詩的な世界観にあふれる非日常的な時間、「生」の時間を生み出す、と書いている。この中の「創造性を引き出す」とは、使用者が持っている創造性を引き出すという意味なのか。

森岡: それは白と透光の効果のところでも考えたことである。白磁にすることで、何も無いということを生み出す効果が白磁にはある。その何も無い状態のところへ透光という効果あるいは質感での効果が加わることで、使っている人に意外性だとか、思ってもいない質感や感覚が加わる。そのことで使用した人あるいは見た人の心が動いてくるという状態を「創造性を引き出す」と書いた。

山崎: 森岡さんの器は決して使いやすいものではないと私は思う。距離感が近いものでもない。むしろ使い手の側が作品に接するときに生まれてくる、予想もつかない感覚があり、そういう点で決してユニバーサルなものではなく、独自の強度のあるものになっている。

補足質問等

不動: 今の山崎先生との質疑応答にあった、使用者の創造性を引き出す、誘発するような作品作りを目指したいということに関連して訊きたい。一品制作をしていく作家活動と、実用に供する器を社会に浸透させることで間接的に表現していく活動、別な言い方をすると、作品自体が自己完結している自律した表現と、使われることで初めて完成するという社会の中でのあり方、言わば他律的な表現、この二つの表現は大きく制作のスタンスが分かれる。その大きな隔たりをつなぐ何か強い共通なもの、森岡さんは作品に宿らせたいと願っているのだと思う。前段で私は、自己矛盾を感じないかと聞いたが、本人の中には、確信をもって一貫した自己表現だという信念がある。しかし、それを他者に納得させるとなると、作品化も、言語化も、極めて険しい道であり、今後さらにブラッシュアップしていく必要がある。使用者あるいは表現を享受する人たちの創造性を引き出すには、心を動かすあるいは刺激を与えて非日常的な驚きを与えるという、使用者側が受け身の態勢にとどまるのではなく、もっと踏み込んで、使い手や享受者自身も森岡さんの言う「自らの光」を見いだせるような、能動的で自発的なあり方を創出するものとの関係を切り結ぶということが必要だ。今後それを継続して追求するのであれば、自分が生み出したものだけで、他者に創造性を引き起こせるのだというところから一歩踏み出で、何かもうひと工夫、研究や調査の領域を広げていくべきだと思う。

森岡: 今回の展示を通して強く感じた詰めの甘さを教訓に、二つの方向性を極めていきたい。

橋本: 森岡さんの仕事にはある完璧さが見える。ただ口述のスライドを見ていて抜けている部分に気づいた。山鬼文庫の部屋で作品写真を撮る場合、どこに問題が出てくるのかということの読みが

できていない。壺だけしか見ておらず、壺のまわりの背景や風景に目が行っていないので見直してほしい。

○ 審査の講評

橋本審査員

森岡さんの仕事を丁寧に追及してきた姿勢を私は評価したい。それから論文も、よくあそこまで資料を作って書き上げたと思う。そういう意味で、博士の学位にふさわしいと思う。

山本審査員

生きる希望への渴望が制作の原動力になっていることを、論文全編を読んで感じた。白い磁器の作品は時として冷たい感じを与えるが、すがすがしさや晴れやかさという感じを与えることもあり、触ったとき持ったときに温かさや優しさまで感じさせてくれる。素材・技法の化学的データをしっかりと取りつつ、作品論へと結びつけ、論文としてまとめたことは大変な業績である。轆轤成形の感覚についても、経験したことのない人が追体験できると思えるほどに書かれており貴重である。作品を日常と非日常とに分けてしまうという考えではなく、交わることで自身の世界観を伝えることを目的とした考えには独自性があり、作品と論文ともに博士の学位にふさわしい。

不動審査員

森岡さんの論文は、明快なコンセプトが提示され、そのコンセプトを実現するのに必要なプロセスと素材・技術に関する科学的なアプローチによる綿密なデータが示されている。研究の成果物としての作品もコンセプトが十全に表出された作品となっている。このような観点から、博士の学位を得るに十分な内容である。「光の呼吸」という大きなテーマを掲げて創作活動に挑んでおり、その意味から、これからもさらなる進化、より大きな到達点に向かって進んでほしい。それゆえに、個人作家としての表現の追求については自分自身で枠を設けずに勇敢に進んでほしい。また、実用分野において、他者によって器が享受されることによって自己実現を果たすという生き方に関心を持って、実践に挑む姿勢を高く評価したい。それらを両立していくのは、困難が予想されるが、だからこそ社会的意義がある。是非、自分なりのメソッドを見いだしてユニークで独創的な器のあり方を探求してゆかれることを大いに期待している。

横山審査員

研究発表を聞くとデータなどを用いる非常に論理的な人だと思っていたが、本音のところではそういう人ではなく、とても感覚的な人だと感じた。いくつかアドバイスし、私のアドバイス以上のことを考察して持ってくるということを何度か繰り返して、立派な論文となった。論文も作品も博士の学位に値する。作品にせよ作家としてのあり方の自覚にせよ、まだ発展する余地がある。自分を制限しないで、様々な可能性を一つひとつ検証し、自分の表現を開拓してほしい。

山崎審査員

本論文の冒頭で森岡さんは、制作の目的は自身に内在する「寡黙な世界の現前化」であると書いている。寡黙な世界観、これを言葉にするのは難しい。この作家の心の中心にある思いは、なかなか饒舌には語れない。ただ、たとえそれをあらわす直接的な言葉が少なくても、この論文を読み進めていくと、歴史的な考察や科学的な分析に支えられて、独自の作品論が伝わってくる。工芸家として器という表現を探究した本論文は、研究テーマの学問的な意義、内容の独創性に富み、作品とともに博士の学位にふさわしいものと評価できる。

以上で森岡希世子の博士学位審査を終了した。

総 合 評 価

審査員一同、論文及び研究作品を優秀と認め、博士学位に相応しいものと高く評価した。